

## 山田耕筰の独唱曲 (第3報)

歌曲 〈からたちの花〉

森久見子

**Suogs by Kōsaku Yamada**

A song "Karatachi blossoms"

Kumiko MORI

### 緒 言

「山田耕筰の独唱曲 (第1報) 露風の詩による作品」(以下「第1報」)、「山田耕筰の独唱曲 (第2報) 連作歌曲〈風に寄せてうたへる春の歌〉」(以下「第2報」)において三木露風の詩による独唱曲の研究を行った。研究を通じて、山田のドイツロマン派及びヨーロッパの音楽の影響を受けた作品から独自の音楽様式を見いだす推移を知り得た。

山田が三木露風(1889-1964)の次に会ったのが北原白秋(1885-1942)である。山田と白秋の出会いは1922年であるが、この時期は山田の円熟期(「第1報」参照)であり、この出会いは山田にとって非常に大きな意味を持つと言われている。山田は白秋の詩による一連の作品を完成させ、また彼独自の音楽様式をも完成させていった。この第二期には優れた作品が多く、現在最も頻繁に演奏されており、一般的にも広く親しまれている。

本論では、白秋の詩による独唱曲の年代順一覧を制作し概観したうえで、歌曲〈からたちの花〉における音楽語法を作曲技法的に理解し、更に実際に演奏する歌手の立場から考察することにした。

### 北原白秋の詩による独唱曲の年代順一覧

山田耕筰編年体作品表を基にして、北原白秋の詩による独唱曲の年代順一覧を制作した。白秋の詩を用いた作品は285曲である。内訳は、独唱曲158曲、合唱曲9曲、カンタータ1曲と団体歌117曲である。独唱曲のうち作曲年代の判明しているものは154曲、不明のものは4曲である。白秋の詩による独唱曲は三木露風の詩による作品と比べ、歌曲と童謡とにはっきり区別することは難しいが、歌曲と童謡と国民歌の3つの群に分けることができる。この3つの群は年代的に多少重なり合っているが、重点的に歌曲群は1922年~1925年、童謡群は1926年~1932年、国民歌群は1932年~1936年となっている。山田と白秋の詩による作品は、白秋の存命中に二人の交友から生まれた作品である。最初の作品は1921年の童謡〈犬のお芝居〉であるが、白秋との交友が始まってからの最初の作品は1922年の歌曲集〈AIYANの歌〉である。最後の作品は1939年の国民歌〈大陸の歌〉である。1948年の童謡〈遊ぼうよ〉は1927年の童謡〈遊ぼうよ〉の改作であり、1945年の歌曲〈とらえてみれば〉は白秋の13回忌記念映画「からたちの花」のために作曲された作品である。

表 北原白秋の詩による独唱曲年代順一覧

曲名	作曲年代	年令	初演・初版	備考
1 犬のお芝居	1921.	大正10	35歳	
2 曼珠沙華(ひがなばな)〈AIYANの歌4〉	1922. 5.14	大正11	36歳	初版1922. 8刊 アルス
3 気まぐれ 〈AIYANの歌5〉	5.14			同 上
4 NOSKAI 〈AIYANの歌1〉	5.15			同 上
5 AIYANの歌〈AIYANの歌2〉	5.15			同 上
6 かきつばた 〈AIYANの歌3〉	5.18			同 上
7 かやの木山の	7.30			初版1922.10雑誌「童話」vol.3-10コドモ社
8 さいかち虫	8.18			初版1922.10雑誌「女性改造」創刊号改造社
9 六騎(ろっきゅう)	8.20			初版1922.10雑誌「詩と音楽」vol.1-2アルス
10 むかし噺	8.31			初版1922.10.5「サンデー毎日」vol.1-29大阪毎日新聞社
11 蟹味噌 (がねみそ)	10.4			初版1922.11雑誌「詩と音楽」vol.1-3アルス
12 象の子	1923. 2.15	大正12	37歳	初版1923.4雑誌「女性」vol.3-4プラトン社
13 紫雲英田 (げんげだ)	2.20			初版1923.4雑誌「令女界」vol.2-4宝文館
14 鐘がなります	5.17			初版1923.8雑誌「女性」vol.4-2プラトン社
15 馬売り	5.20			初版1923.9雑誌「女性」vol.4-3プラトン社
16 おろかしく	8.11			初版1923.10雑誌「詩と音楽」vol.2-9アルス
17 芥子粒夫人(ポストマニ)1	11.16			初版1924.4雑誌「女性」vol.5-4プラトン社
18 バイチカ				初版1924.8刊満州唱歌集尋常科1.2学年用東亜図書
19 待ちぼうけ				同 上
20 やなぎのわたの				同 上
21 全国青年団民謡〈空は青雲〉	1924. 1.15	大正13	38歳	初版1924.3雑誌「青年」vol.9-3付録日本青年館
22 国民の歌—雑誌「現代」より日本国民に奉ぐ	3.15			初版1924.5雑誌「現代」vol.5-5講談社
23 短夜	5.14			初版1924.8雑誌「女性」vol.6-2プラトン社
24 赤い夕日に	5.14			初版1924.10雑誌「音楽」vol.2-4プラトン社
25 城ヶ島の雨	5.15			初版1924.7雑誌「女性」vol.6-1プラトン社
26 芥子粒夫人(ポストマニ)2	6.18			初版1924.9雑誌「女性」vol.6-3プラトン社
27 芥子粒夫人 (ポストマニ) 4	6.19			初版1924.11雑誌「女性」vol.6-5プラトン社
28 芥子粒夫人 (ポストマニ) 3	8.10			初版1924.10雑誌「女性」vol.6-4プラトン社
29 雀追い	10.30			初版1925.1雑誌「女性」vol.7-1プラトン社
30 かなかな	11.6			初版1926.8刊セノオヤマダ楽譜1039
31 子どもの大工	1925. 1.9	大正14	39歳	初版1926.11刊「子供の歌」セノオ音楽出版社
32 新入生	1.9			同 上
33 かんなくづの笛	1.9			同 上
34 あの子のお家	1.9			同 上
35 ころころ蛙	1.9			同 上
36 豆の葉	1.9			初版1930.11刊旧全集4 春秋社
37 からたちの花	1.10			初版1925.5雑誌「女性」vol.7-5プラトン社 初演1925.6東京 藤原義江 初録1925.6荻野綾子 Nipponophone15705
38 鷹	1.11			初版1930.11刊旧全集4 春秋社
39 かえろかえろと	2.24			初版雑誌「童話」vol.6-4コドモ社
40 明治天皇頌歌	9.?			初版1925.10刊セノオ楽譜402
41 父母の歌				初版1931.3刊旧全集7 春秋社
42 アンデルセンの姿絵に	未詳			
43 アンデルセンの晩	未詳			アンデルセン歿後50年祭のため作曲 同 上
44 建国歌	1926. 1.19	昭和1	40歳	初版1926.2刊セノオ楽譜406 建国祭(紀元節)式歌
45 こぬか雨	6.17			初版1930.11刊「耕作歌曲選集幼年篇」日響出版会
46 げんげ草	6.17			同 上
47 忘れた花	7.20			藤原義江のために作曲
48 酸模(すかんぽ)の咲くころ	11.8			初版1927.6刊「山田耕作童謡百曲集1」
49 足踏	11.8			初版1927.6刊「山田耕作童謡百曲集2」
50 ほういほうい	11.8			初版1927.6刊「山田耕作童謡百曲集3」
51 夜中	11.8			初版1927.6刊「山田耕作童謡百曲集4」
52 からまつ原	11.8			初版1927.6刊「山田耕作童謡百曲集5」
53 お月夜	11.8			初版1927.6刊「山田耕作童謡百曲集6」
54 たんばば	11.8			初版1927.6刊「山田耕作童謡百曲集8」
55 お月さま	12.16			初版1927.6刊「山田耕作童謡百曲集9」

山田耕筈の独唱曲（第3報）

	曲名	作曲年代	年齢	初演・初版	備考
56	雀追い	12.16		初版1927.6刊「山田耕作童謡百曲集10」	1924<雀追い>と同じ詩
57	お米の七粒	12.16		初版1927.11刊「山田耕作童謡百曲集41」	
58	日永	12.16		初版1927.11刊「山田耕作童謡百曲集42」	
59	郵便くばり	12.17		初版1927.11刊「山田耕作童謡百曲集45」	
60	雨のあと	12.17		初版1929.4刊「山田耕作童謡百曲集81」	
61	雨の田	12.17		初版1929.4刊「山田耕作童謡百曲集82」	
62	寄り道	12.17		初版1929.4刊「山田耕作童謡百曲集84」	
63	砂山	12.17		初版1929.4刊「山田耕作童謡百曲集85」	
64	わらび	12.17		初版1929.4刊「山田耕作童謡百曲集86」	
65	葡萄の蔓	12.17		初版1929.4刊「山田耕作童謡百曲集87」	
66	こんこん小山	12.17		初版1929.4刊「山田耕作童謡百曲集88」	
67	昨夜のお客さま	12.17		初版1929.1雑誌「赤い鳥」vol.22-1赤い鳥社	「山田耕作童謡百曲集89」
68	雀のお宿	12.21		初版1929.4刊「山田耕作童謡百曲集90」	
69	和蘭陀船	12.21		初版1928.7刊日響楽譜	
70	鶏爺さん	12.27		初版1929.4刊「山田耕作童謡百曲集91」	
71	浪の音	未詳			未完
72	あわて床屋	1927.1.7	昭和2	41歳	初版1927.11刊「山田耕作童謡百曲集46」 初演1927.11.26藤原義江
73	仔馬の道ぐさ	1.15			
74	新帝奉賛歌<昭和の黎明(しのめ)>	1.15		初版1927.3雑誌「クラク」vol.6-3プラント社	
75	からたちの花Ⅱ	1.15		初版1931.6刊旧全集5 春秋社	1925<からたちの花>と同じ詩
76	この道	2.24		初演1927.10.3東京 藤原義江	初版1927.11刊「山田耕作童謡百曲集47」
77	たあんきぼうんき	3.24		初版1927.6刊「山田耕作童謡百曲集7」	
78	風	3.		初版1927.11刊「山田耕作童謡百曲集48」	
79	JOAK	1927.3.24	昭和2	41歳	初版1927.11刊「山田耕作童謡百曲集49」
80	ちんちん千鳥	3.?		初版1927.11刊「山田耕作童謡百曲集50」	
81	輝く朝	10.?		初版1928.7刊日響楽譜158	
82	少女の歌	11.6		初版1927.12刊少女倶楽部編輯局	
83	幼年の歌	11.6		初版1928.1「刊雑誌幼年倶楽部」vol.3-1付録講談社	
84	感謝の朝々朝のいのり・夕べのいのり	11.6		初版1928.1刊日響楽譜113	
85	<昭和の日本>の歌	12.?		初版1928.1.1付大阪朝日新聞	
86	遊ぼうよ	未詳		初版1927雑誌「幼年の友」vol.1.19実業之日本社	
87	交通の歌	1928.	昭和3	42歳	日本交通協会委嘱作品
88	松島音頭			初版1928.5刊日響楽譜135	
89	秩父の宮さま			初版1928雑誌「コードモノクニ」vol.7東京社	
90	漣は	5.4		初版1929.4刊「山田耕作童謡百曲集83」	
91	牡丹	5.28		初版1928.7刊雑誌「赤い鳥」vol.21-1赤い鳥社	
92	あのこえ	6.9		初版1928.8雑誌「赤い鳥」vol.21-2赤い鳥社	
93	多蘭泊	7.16		初版1928.9雑誌「赤い鳥」vol.21-3赤い鳥社	
94	筑波	9.15		初版1928.11雑誌「赤い鳥」vol.21-5赤い鳥社	
95	落葉	10.9		初版1928.12雑誌「赤い鳥」vol.21-6赤い鳥社	
96	虹と仔馬	10.16		初版1930.10刊「耕作歌曲選集幼年篇」日響出版協会	
97	朝日はのぼる	11.?			
98	つらつらつばき	12.11		初版1929.2雑誌「赤い鳥」vol.22-2赤い鳥社	
99	秩父宮御成婚奏祝歌<我等が宮様>	未詳			
100	日本は勝ちたり	未詳			
101	ふれふれ粉雪	1929.1.8	昭和4	43歳	初版1929.3雑誌「赤い鳥」vol.22-3赤い鳥社
102	桐生音頭	2.?		初演1929.4.21桐生市 石井漢舞踊大会	
103	繁宿の歌	8.21		初演1929.9.1 JOAK 震災記念番組「国民精神作興の夕」	
104	復興行進曲	10.17		初演1929.10.19~東京市政調査会主催帝都復興展覧会	
105	空の行進曲	1930.3.?	昭和5	44歳	初録1930.3 Columbia
106	からりこ	11.2		初版1931.1雑誌「赤い鳥」復刊vol.1-1赤い鳥社	
107	三日月おじさん	11.14			
108	鶯	11.16		初版1931.2雑誌「赤い鳥」復刊vol.1-2赤い鳥社	
109	お馬乗り「マザア・グウス」より	1931.1.15	昭和6	45歳	初版1931.4雑誌「赤い鳥」復刊vol.1-4赤い鳥社
110	雪こんこ	1.16		初版1931.3雑誌「赤い鳥」復刊vol.1-3赤い鳥社	
111	百舌鳥の子	1.16			
112	月夜の飛行船	1.16			

名古屋女子大学紀要 第36号 (人文・社会編)

	曲名	作曲年代	年令	初演・初版	備考	
113	さむい夕やけ	1.16				
114	クリスマスが来やすわい「マザア・グウス」より	1.18		初演1931.10.29大阪 牧嗣人	初版1931.11雑誌「ムジカ」創刊号春秋社	
115	ウエドロ (水桶)「ロシア人形の歌1」	3.		初版1931.5 雑誌「赤い鳥」復刊vol.1-5 赤い鳥社		
116	ニヤァニシュカ(お乳母ちゃん)「ロシア人形の歌3」	3.		初版1931.6 雑誌「赤い鳥」復刊vol.1-6 赤い鳥社	初演1931.7.17レニングラード	
117	カロウア(牛)「ロシア人形の歌4」	3.		初版1931.7 雑誌「赤い鳥」復刊vol.2-1 赤い鳥社	1931.9.21東京	
118	ロートカ(小舟)「ロシア人形の歌5」	3.		初版1931.8 雑誌「赤い鳥」復刊vol.2-2 赤い鳥社	いずれも牧嗣人	
119	ジュエラチカ(娘)「ロシア人形の歌2」	3.		初版1931.9 雑誌「赤い鳥」復刊vol.2-3 赤い鳥社		
120	日本女性の歌	11.21		初版1932.1 雑誌「婦人公論」vol.17-1 付録中央公論社		
121	もといたお家	12.2		初版1932.3 雑誌「赤い鳥」復刊vol.3-3 赤い鳥社		
122	日本産業の歌	1932.1.	昭和7	46歳	初版1932.? 刊大阪商工会議所	
123	ひょうたん	1.		初版1932.4 雑誌「赤い鳥」復刊vol.3-4 赤い鳥社		
124	軍馬	1.		初版1932.4 雑誌「赤い鳥」復刊vol.3-4 赤い鳥社		
125	馬鈴薯むき	1.		初版1932.5 雑誌「赤い鳥」復刊vol.3-5 赤い鳥社		
126	もの	1.		初版1932.6 雑誌「赤い鳥」復刊vol.3-6 赤い鳥社		
127	日本国民の歌	3.		初版1932.5 雑誌「日本国民」第2号日本国民社		
128	歩兵第三聯隊歌	3.		初録1932.9 Columbia 27100		
129	歩三の春	3.		同上		
130	上海特急	4.27				
131	満州興国の歌	未詳		初録1932.3 Columbia 26831		
132	霊峰富士	未詳		初録1933.2 Columbia 27226		
133	御誕生御誕生	1933.1.2	昭和8	47歳	初版1933.12.24付国民新聞 民友社	
134	満州の春	1934.2.21	昭和9	48歳	初録1934.5 Columbia 27844	
135	馬車	2.				
136	起て起て青年	5.31		初版1934.7 雑誌「昭和維新」第5号付録政改消聯盟出版部		
137	解消節	5.		同上		
138	台湾青年の歌	未詳		初録1934.12 Columbia 28172	台湾教育会制定	
139	台湾少年行進曲	未詳		同上	同上	
140	陸軍被服廠の歌	1935.1.	昭和10	49歳		
141	輝け朝鮮	8.		初録1935.10 Columbia 28571		
142	選ばうよみんな	12.9		初版1935.12刊選挙黨正中央聯盟		
143	選挙黨正の歌			同上	同上	
144	現代の歌	1936.	昭和11	50歳	初版1936.7 雑誌「現代」vol.17-7 講談社	
145	邦人一如の歌			初版1936.8 雑誌「邦人」vol.2-8 邦人社		
146	拓けよ満州	8.26		初演1936.9.18満州事変5周年記念講演会		
147	関東軍をねぎらう歌			同上		
148	継の宮さま	9.27				
149	法隆寺	10.30		初版1936.12雑誌「ムジカ」vol.4-3 春秋社		
150	逃げたり神風	1937.4.	昭和12	51歳	初版1937.4.17付東京日日新聞	
151	大陸日本の歌	1939.	昭和14	53歳	初演1939.2.11紀元節	*文部省制作の国民歌6篇の1曲
152	選ばうよ	1948.	昭和23	62歳		未完
153	とらえてみれば (別名:恋の鳥)	1954.9.18	昭和29	68歳	初録 Columbia 25532	
154	秋にはや	不明				
155	海の向う	同上			1934.4刊「中等音楽教科書女子用第1学年」所収	
156	弘法大師讃仰歌	同上				
157	初恋	同上			旋律のスケッチのみ	
158	明治節の歌	同上				

山田と白秋は共に雑誌「詩と音楽」を1922年9月アルス社より創刊したが、関東大震災でアルス社が焼失したため1年で休刊となった。その間に同誌上で発表された二人による作品は独唱曲〈六騎〉、〈蟹味噌〉、〈おろかしく〉と合唱曲〈かぐや姫〉である。独唱曲〈かやの木山の〉は1922年10月刊行の雑誌「童謡」で発表されたが非常に優れた作品であり、山田にとっても自信作であったことから雑誌「詩と音楽」に再録された。この他に三木露風詩独唱曲〈木の洞〉、〈狸橋〉、〈病める薔薇〉、大木篤夫(悼夫)詩独唱曲〈明日の花〉と高原正詩独唱曲〈ふえ〉が

発表された。

1926年末より作曲の始まった「童謡百曲集」には白秋の詩による作品が32曲含まれている。（残りの68曲は野口雨情の詩28篇，三木露風の詩20篇，西条八十の詩10篇と川路柳蛙の詩10篇が用いられている。）なお，「童謡百曲集」の後は復刊された雑誌「赤い鳥」に童謡22曲と合唱曲1曲を発表している。

1932年以降はその時代を背景とする多くの時事的な国民歌が作曲されている。それらの作品のほとんどは詩人と作曲家の自発的な創作ではなく，外部からの委嘱作品である。

### 歌曲 〈からたちの花〉

#### 作曲年代

歌曲〈からたちの花〉は1925年1月10日に作曲され，荻野綾子（「第2報」参照）に捧げられた作品である。雑誌「女性」（プラトン社）の1925年5月号に発表され，6月11日の藤原義江独唱曲（帝国劇場 東京）で初演された。贈られた荻野綾子は1925年6月に録音（Nipponohon）している。

1922年の山田と白秋の出会いから歌曲集〈AIYANの歌〉（全5曲），バラード〈芥子粒夫人〉（全4曲），歌曲〈かやの木山の〉〈六騎〉，〈蟹味噌〉等数々の優れた作品が生まれた。歌曲〈からたちの花〉は山田と白秋の出会いから3年後に作曲された。山田は1916年の三木露風詩〈唄〉で「ある満足」（「第一報」参照）を得て，1917年の三木露風詩〈野薔薇〉で彼独自の様式を見出し，〈からたちの花〉で独自の音楽様式を完成させた。

〈からたちの花〉に見られる音楽語法——これについて詳しく論ずるのがこの稿の課題のだが——は，すでに1922年の〈かやの木山の〉や〈むかし噺〉で部分的に見られるが，以後もこの傾向の作品が多くなり1923年の〈ペチカ〉はこの様式による作品である。また〈からたちの花〉が作曲された前日1925年1月9日の作品，いずれも白秋の詩による〈子どもの大工〉，〈新入生〉，〈かなくづの笛〉，〈あの子のお家〉，〈ころころ蛙〉は首尾一貫この様式でまとめられた作品である。

山田は1927年に再び白秋の詩「からたちの花」を用いて〈からたちの花Ⅱ〉を作曲しているが，8小節の短い有節形式にしている。また，1925年の歌曲〈からたちの花〉を，1928年にヴァイオリン独奏とピアノ独奏，1937年にフルート独奏のために編曲している。

#### テキスト

白秋の詩「からたちの花」は1925年1月に作られたものである。初版は1925年7月アルス社刊行の絵入童謡集「子供の村」であるが，1926年6月新潮社刊行の童謡詩人叢書第1編「からたちの花」に再録された。「子供の村」は，子供の生活の春夏秋冬と子供の夜話の5部から成り，詩「からたちの花」は夏の部に入っている。ほとんどの作品は1923年と1924年のもので，序詩を含む42篇が収録されている。また，画家の清水良雄によるそう画と白秋自身によるカットが掲載されている。「からたちの花」には高度な白秋自選の詩38篇が収録されている。

歌曲〈からたちの花〉は1925年1月の作品であることから，詩「からたちの花」は絵入童謡集「子供の村」の刊行以前に白秋から直接山田に手渡されたものである。

譜例 1

[M. M. J-58] Andante tranquillamente  
sempre sotto voce

からたちのはながさいたよ  
 しろいしろいはながさいた  
 よからたちのとげはいたいよあ  
 どいあをいはーのとげたよか  
 らたちははたのかきねよいつもいつもと  
 ほるみちたよからたちもあきはみのる  
 よまろいまろいーきんのたまだ  
 yo ma-ro-i ma-ro - i \_\_\_\_\_ ki - n no ta-ma da  
 よからたちのとげでないとよーみ  
 んはみんはやさしかたよか  
 らたちのはながさいたよしろい  
 しろいはながさいたよ

Performance markings and dynamics include: *pp*, *mf*, *p*, *ppp*, *f*, *len.*, *lungo len.*, *mf len.*, *in fretta un poco*, *a tempo*, *esitando*, *molto*, *riten.*, *poco a poco riten. len.*, *molto riten. e dim.*, *pp*, *ppp*, *mf*, *p*, *pp*, *ppp*.

からたちの花

からたちの花が咲いたよ。 白い、白い、花がさいたよ。	からたちも秋はみのるよ。 まろいまろい金のたまだよ。
からたちのとげはいたいよ。 青い青い針のとげだよ。	からたちのそばで泣いたよ。 みんなみんなやさしかったよ。
からたちは畑の垣根よ。 いつもいつもとほる道だよ。	からたちの花が咲いたよ。 白い、白い、花が咲いたよ。

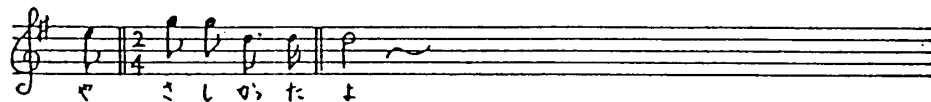
詩「からたちの花」は、5, 3, 4, と3, 3, 4のリズムを持つ2行を1節とした6節から成っている。各節は、「からたちの」（「からたちは」「からたちも」）で始まり全ての行に終助詞「よ」が置かれていること、また、私心を取り去り誇張も装飾もない最小限の言葉で構成されていることその他、句の仕立て方や句の続け具合が整理された簡潔で読みやすい形態を整えている。テキストの内容は全体に簡素で、透明感のある暖かいふん囲気を有している。白い花は白い花、青い針は青い針としてそのまま写され、眼前の光景が淡々と描写されていく中で、それにつながる過去が回想され（第3節、第4節）叙情性が余情として伝わってくる。

音楽様式

音楽形式について言えば、2行6連の詩に有節形式ではなく通作形式で作曲されている。詩の第3節と第5節は叙情的な内容であり、音に多少の動きが見られるものの作品全体はダイナミックな変化は少ない。

調性は確立されており、初期の作品に見られる調性の拡大はもちろんのこと臨時記号もほとんどない。歌の旋律に使用された音符数152のうち8分音符が129あり、この曲は8分音符を主体としている。また、詩の音節数が150であることから、8分音符1個に1音節という原則に従って作曲されていると言える。音符数152はタイを2箇所含むものであるから実質的には150であり、1音符対1音節の基本的な書法が徹底されている。

譜例 2



旋律は8分音符を単位として構成され、「ヨナ抜き」音階を基とし、幅広い跳躍はできる限り避けられている。従ってメリスマはなく日本語の抑揚に忠実に書かれ、なだらかで自然の美しさを有している。リズムも8分音符を主体としていることから平淡である。♪♪のリズムが3度使われているが、そのうち譜例1-⑫は作曲当初は均等な8分音符2つであったと聞いている（譜例2）。拍子は3/4拍子と2/4拍子の混合拍子である。詩の各節の始めと終わりは3/4拍子で書かれ、また各節の頭はアフタクトで始まっている。3/4拍子と2/4拍子の使い分けは、第1節と第6節とは同一であるが、他の節では後半が少し異なっている。このような拍子の使い分けは「第1報」や「第2報」でも述べてきたように日本語の韻律を考慮するものであるが、こ

譜例 3

譜例 4

の方法はこの時期には定着しており、巧みに使い分けられていて不自然さや抵抗は全く感じられない。山田の作品の特徴は発想指示が並はずれて緻密なことである。〈からたちの花〉の場合には言葉による指示は少なくなっているものの強弱等の記号はこれまでと同様多用されている。

ピアノの部分は、しばしば歌の旋律を重複している。また、用いられている和音も変化和音は少なく、三和音を主体として透明感を保持している。第18小節から第20小節まで（詩の第3節「いつもいつもとほる道だよ」の部分）のピアノ伴奏右手の書法は山田の歌曲伴奏の常とう句である（譜例3）。また、第33小節には歌の旋律が最高潮に達した後の余韻を伝えるようにピアノ伴奏部に分散和音形が現れる（譜例4）。しかし、〈からたちの花〉のピアノ伴奏部全体について言えば、歌の旋律と対等の層を形成することはなく常に歌の淡い背景となっている。

山田は白秋との出会いを契機として、歌曲を「詩と音楽の融合体」と考えるようになる。このことについて彼が最もはっきりと述べているのは「総合芸術より融合芸術へ」の文中においてである。該当する箇所を引用するならば「音楽と言葉との融合は決して不可能なものではない。かの歌謡や歌劇中の個々の独唱曲の如きものには、しばしば純な芸術的融合が行はれている。この事実を押し進めて行けば、楽劇の中にも音楽と言葉との融合を実現し得ないことはないということになる。が、完全な融合を行う為には、詩句はことごとく煎じつめられた純真な表現であることが必要である。」とある。〈からたちの花〉こそまさに作曲者のこうした音楽的理念の完璧な実現と言えるであろう。歌曲〈からたちの花〉は白秋の詩「からたちの花」にこめられた詩想——詩人の魂——を直感的に歌いあげた作品であり、山田が理想として追求してきた真の「美」——自然界に生成する植物の花の美しさにたとえられる——に到達した作品である。



## 音と言葉の関わり

山田は自分の作品に最高のものを求めていたように、歌唱に関しても最高の演奏を求めていた。それは一言で言えば「詩と音楽の融合体」（前筆）である歌曲への理解と共感である。山田の音楽作品の出発点は、私達の日常の自然な会話体にある。文学に身をよせるならば、口語体の詩の朗読である。山田は自ら詩を分析し、朗読し、そこから旋律を引き出した。山田の歌の旋律は、常に詩と不可分の関係にある。

山田は生前に自作を教材とする歌唱法の講座を日本各地で催し、そのテキストを出版したりもした（「歌の唱ひ方講座」全4巻 日本交響楽協会出版部 1928~1929）。今日においても演奏家は、山田の歌曲や童謡の楽譜に接する時、非常に注意深く緻密に読譜せねばならないだろう。一般的な五線譜の形態に記号化された楽譜から彼の作品の特質を敏感に読み取らなければならないのである。その具体的な方法として、山田の歌曲や童謡の楽譜に記された多くの演奏記号を、直接詩句自体に由来するものと、純粹に音楽的表現を目ざしたものとに区別してみたい。

細かく記された<>の記号を少し注意してみると、>の記号は助詞や終助詞に向けて付されている。日本語を正しく美しく発音することは、日本語を正しく美しく話すということにつながっている。このことを念頭に置き丁寧に詩を詠むと、例外はあるものの楽譜に付された>と詩を詠んだ時の>と一致する。従って>の記号は発想指示の強弱として楽譜に付されたものと、言葉に結びつけられるものとの2つに区別することができる。そこで、言葉に結びつくものを取り除いてみると、フレーズの流れが大きくなる（譜例5）。例外としては譜例1-⑤, ⑦, ⑨, ⑩, ⑪, ⑭の部分である。譜例1-⑪第30小節では第29小節の後半より

譜例5



始まるくの頂点に当たる「よ」であるが、「よ」にPPが付されているため強く発音されることはなく問題はない。むしろ<がPPに向かっていることに留意しなければならない。つまり、「ないたよ」の言葉の感情をなつかしむ余韻のようにヴォカレで歌われる「よ」につながる歌い手の内面の心理的なクレッシェンドなのである。これと反対に譜例1-⑭第33小節の「よ」は外へ向けての感情表出である。その他は印刷時の不手ぎわによるものではないかと推察される。

<>の記号をただ単に強弱記号として歌唱することは可能である。しかし言葉と結びついたものを見きわめて歌唱するならば、より自然でのびやかな、スケールの大きいフレーズが得られることが考えられる。

テヌートについても音に付されたものと言葉に付されたものの2つに分けて考えられる。改めてテキストをながめてみると、当面注目してみたいのは各節の2行目（テキスト参照）である。第1節と第6節では「白い、白い、」と読点があるが他の節の同じ部分には読点がない。ここで、からたちの白い花を見て思いをはせている白秋の詩想をくみ取らなければならない。山田は初めの「白い、」にテヌートを、後の「白い、」にレガートを記している。この部分のテヌートは発音とか丁寧に歌うということより言葉にこめた白秋の詩想を表現しているものであ

る。譜例1-①, ③, ⑥は言葉に, 譜例1-②, ④, ⑧は音に付されたものと考えられる。

しかし, 譜例1-⑧の「だ」にテヌートが付されていないことや, 伴奏部のテヌートの有無については印刷時の不手ぎわによるものもあると推察される。このことや, いずれに分別するか判断し難い部分もあるため, テヌートについては他の曲を精査する必要がある。

8分音符を主体としているこの曲の中で使われている♪♪のリズムについても言葉との関わりが考えられる。♪♪のリズムが使われている譜例1-⑫, ⑬, ⑮はいずれも molt riten と指示されている部分である。作曲時に8分音符2つを用いていたところを後に♪♪に書き改めたことは「やさし」の「し」の発音のためと考えられる。山田は日本語の「シ」について「shi」や「schi」, まして「si」ではなくもっと柔らかい響を有する「シ」を求めている。このことから, molt riten の指示のあるこの部分の「し」は8分音符より16分音符を用いた場合の方が山田の求めている「し」を発音しやすかったのではないかと推察される。これに続く「かったよ」の♪♪は促音「かっ」の後の「た」が「かっ」より目立つことなく自然に「よ」に入るためであり, 最後の♪♪についても同様のことが推察される。

## 結 語

歌曲〈からたちの花〉を分析し考察してきた結果言うべきことは, まず何よりもこの作品が山田の「詩と音楽の融合体」の理念に基づく彼の歌曲の理想像だと言うことである。このことを理解したうえで歌手が彼の作品にどのようにアプローチするべきかについて具体的なメソッドを得た。

山田の場合には歌曲を作曲している時, 新たに生まれつつある作品が内心で肉声の旋律となって鳴り響いていたのではないだろうか。それゆえ山田は歌曲を作曲する際に理想とする演奏も作り上げていった。一般的な曲想はもちろんのこと, 発音や発声法, 呼吸法, 声の響の色彩, 軽重, 柔硬等, 歌手に課せられた全ての留意点についてである。旋律が作曲されると同時に歌われる旋律としてその歌唱法も作られていたと考えるのは, 山田の音楽家としての経歴(「第1報」参照)からも充分理解できることであろう。

作曲家が作品の演奏について, 自分の意図を演奏家にこと細かく求めるタイプと, 多くを演奏家にゆだねるタイプとがあるが, 山田は前者である。とすれば, 山田の作品を演奏する場合には楽譜を精読し, 山田の意図を充分にくみ取り, 山田の理想とする演奏にできる限り近づかなければならない。

歌曲〈からたちの花〉は山田と白秋, この二人の協力から生まれた歌曲群の代表作である。次回も引き続き白秋の詩による作品について論ずる予定である。ことに今回の成果をふまえて, 〈からたちの花〉以前の作品にさかのぼって考察してみることにする。

## 引用・参考文献

- 山田耕筰「総合芸術より融合芸術へ」 雑誌「詩と音楽」1月号P58 アルス社 大正12年
- 山田耕筰「山田耕筰全集2 歌謡曲集」第二巻 第三巻 第四巻 春秋社 昭和5年
- 北原白秋「日本児童文学大系」第七巻 北原白秋集 ほるぷ出版 昭和52年
- 北原白秋「白秋全集」18 岩波書店 昭和60年
- 北原白秋「緑の觸角」復刻叢書 久山社 昭和62年
- 後藤暢子「山田耕筰編年体作品表」 遠山音楽財団附属図書館 昭和58年